

鉢植え花菖蒲の、秋の株分けと肥料

静岡県掛川市 永田敏弘

この文章は、一昨年前にホームページに掲載したものです。参考になったという意見こそあれ、不評は今のところありませんので、今回掲載することにしました。ちょっと辛口の表現が多いですが、どうかご辛抱ください。

花菖蒲の栽培のポイントは、株の力を衰えさせないということです。常に元気で生育旺盛な状態にしておくことが大切です。その上で考えたとき、株分け植え替えは、腰水管理は、肥培管理はどのように考えればよいか、思い当たるふしを書き出してみました。ご参考になれば幸いです。

開花後の株分けの矛盾点

まず思い当たるのが、そもそも開花後が株分けの最適期的なだろうかということです。開花期間中は肥料が無いほうが花型が端正に咲くという教えから、一般に肥料は効かせ

ません。しかし、開花期は急速に大きくなり大きな花をさかせるため、本来かなりの肥料分が必要なのは確かで、開花が終わると途端に疲れた感じになります。こうした時期に、また最近夏がひじょうに暑く、六月末ともなるとかなり暑い日が出てきますが、こういった暑さに向かう時期に、開花で疲れた株を分けなければならないというのが、まずおかしい点です。

次に、開花直後では、新苗の発育がやや不十分ではないかという点です。肥料不足で貧弱な株に花を咲かせた後などなおさらです。その株をまた一條づつに細かく分けるため、一苗あたりに着く根も少なくなり、苗の勢いも削がれます。このため、活着するまで一ヶ月くらいはかなり長い期間、肥料が与えられなくなります。暑さに向かう時期なので、苗がしっかり活着してからでないと、肥料負けることがあるからです。しかし、花菖蒲は

この夏場の出来で、その年の株の出来がほぼ決まってしまう。特に開花後から盛夏は、新しい條が旺盛に伸張して株が太る重要な生育期間です。開花で衰弱し、株分けで衰弱し、暑さで衰弱おまけに肥料もやれないでは、良い株ができるはずがないのではないのでしょうか。繰り返しますが、花菖蒲栽培で大切なのは、株の勢いを衰えさせないという点です。一度貧弱な状態にしてしまうと、回復せぬまま生育シーズンが終わってしまうからです。九月になった段階で、條の根元幅が鉛筆よりやや太い程度では、来年満足に咲かないと考えて良く、そんな苗を作ってはいけません。

こうした開花後の株分けの矛盾を無くすため、いっそのこと開花後に株分けせず、夏じゅう肥培して株を作り、秋に株分けするというのがいいです。

最初にお話しておきますが、これから述べる作り方は、とりあえず華やかに咲かせるための鉢栽培での一つの方法で、この方法が一番良いわけでは勿論ありません。現在、上手に出来ているのなら、敢えてこの方法を取る必要はないと思います。また、露地栽培にはこの作り方は直接には応用できません。私は

この方法の方が鉢植えの植え替えによる失敗が少ないのではと感じていますが、開花後の株分けでも、良株を早く分ければ、そしてその後の管理が適切なら、立派な株になるのを知っています。また、この方法は花後植え替え、肥培すれば秋には鉢の中で大きな株になるという見込みのある株の場合に行う方法です。鉢植えで二年以上経過している株や、鉢の中で根が極端に詰まっている、または腐っているような場合は、早めに株分けするべきです。なお、それぞれの作業は、関東以西の一般暖地を対象としています。

夏に肥やす

まず、開花後にさつそく「お礼肥え」を与えます。仮に六月二十日とします。肥料は窒素成分が多く含まれている一ヶ月程度効く即効性の化成肥料を使います。マグアンプKなどの緩効性肥料は補助として与えても良いですが、まず肥料切れを速やかに回復させるため、即効性を使います。肥料は、窒素、リン酸、加里の比が、15・10・10位のものなど、窒素成分ができれば10%程度以上あるものを使います。花菖蒲は生育に窒素成分を多く必要とし、リン酸、加里はあまり吸収しません。よつ

て窒素成分が多くないと効果がありません。こういう即効化成は一般の園芸店では見られない場合がありますが、農作物用の肥料や薬剤を扱っている専門店なら置いてある場合があります。

直径二ミリ程度の粒状化成である場合が多いです。これを、一般の鉢花に与えるより少し多い目に五寸鉢で二十粒、二十五粒くらい施します。が、この数に拘る必要は全くなく、新葉の色を見て判断します。即効性の化成なら、十日もすれば、葉條の色が濃い緑色になり中心から新葉が出てきますが、これが肥料が効いてきた証拠です。色が上がらなければ再度施します。品種により葉の緑の濃さも異なりますので、要領がつかめないときは、実験で一鉢だけ枯らしても良いような品種で肥料を多く与えてみてください。かなりの多肥に耐え、また旺盛に生育するのがわかったと思います。

なお、NHKの本のように緩効性肥料や油粕の団子のような有機質肥料を使わないのは、これらはゆるやかに長く効きますが、ここぞというところで肥やしたいときに、即効性がないからです。即効性肥料とうまく併用すれば、逆に肥料切れの心配もないです。

が・。その他、ハイポネックスなどの液肥は、私は使ったことがないのでよくわかりません。

次に七月二十日になったら、また先月と同じ分量の肥料を施し、八月も二十日に同じように施肥します。ここでは一応一月間隔にしましたが、出来を見ながら二十日間隔くらいでも良いですし、猛暑の真夏も肥料を休む必要はありません。新葉を繰り出すペースが鈍り、葉色の濃さが少しでも薄れたと感じたら、予定日前でもただちに施します。葉色で肥料の効き具合を判断するくせをつけることです。こうするうちに八月の末には立派な株が出来上がりますので、これを株分けします。そのままにしておいても、来年大株になって咲くような株になっていますので、このまま分けて植え付けて、根付いてくれれば良いわけです。

腰水はしない

夏場の管理で注意しなければならないのは、なるべく腰水管理をしないという点です。特に夏場に肥培するこの栽培法で溜めっぱなしの腰水を行うと、土が確実に腐敗し根が腐りますので、腰水作りをされている方

は、ここに書いてある肥培法は取らない方が懸命です。

ほとんどの参考書には「鉢栽培は腰水で管理」と書いてありますし、花菖蒲は水草という先入観から、腰水作りをしたくなり、とくに初心者の方は深い腰水をしてしまいがちですが、これがまちがいのもとです。

花菖蒲の性質からすれば、もともと腰水はそれほど必要ではありません。特に開花後に分けた苗を腰水で管理すると、新根の発根が緩慢になり、それだけ苗の発育が遅れます。こうして衰弱した苗を、夏場に深い腰水に漬けたままにすると、強い日射で水が煮え苗は枯死します。開花後の株分けでの失敗は、このパターンが多いです。

腰水は、開花時期には草丈を伸ばし、極大輪花をみずみずしく咲かせる効果があります。が、そのほかの季節には水やりの手間が省けて便利だけです。

しかし真夏に一回でも極度に乾燥させてしまうと、即座に葉が黄変し、株の体力が削がれますので、目やすとして、腰水をしない場合は、鉢土の表面が乾きかけたら十分に水を与えるようにします。

日中外出してこまめに管理できないとか、鉢数が多く灌水がたいへんな場合は、乾く

ようなら、その日の夕方には水が切れる程度に、一センチ程度のごく浅い腰水を行うか、スプリンクラーなどによる上からの自動灌水、またはエプアンドフロアによる底面給水を考えます。とにかく、何日も水を溜めるような腰水は絶対しないようにして下さい。

メイチュウ防除

もう一つ、注意しなければならないのはメイチュウの防除です。夏場の籐にメイチュウが入ると、秋口に植え付けた後の生育が悪くなります。例年発生する場合は、オルトランなどの殺虫剤を、盆前に散布しておきます。

秋の株分け方法

関東以西の平野部で、八月二十日頃から九月十五日前後までが秋の株分けの適期ですが、良株なら立秋頃から分けてもかまいません。その後九月下旬頃までは可能です。株分けの方法は、開花後の株分けと変わりありませんが、気をつける点は、根茎のみを切り、長く伸びた根は切らず株を引き裂くように分けることです。そして一篠つつに細かく分ける

に、二本立てくらいにとどめ、根周りの土もある程度付けて残します。この方法なら真夏に株分けしても活着します。

また、植え替えのとき葉の先を切り落とし



根茎だけを切って引き裂く



開花後の肥培で良く育った苗 (13.5 cmポット)
すでにしっかりとした苗が出来ている



すでに十分な根が張っている



植え付け後14日目ようす
8月31日



植え付け完了 8月17日
(13.5 cmポット)

ますが、八月二十日頃なら葉長の約半分、九月に入ったら三分の一切る程から、全く葉を切らずにそのまま植付けます。秋は葉で作られた同化養分を根に蓄える時期なので、なるべく葉は切りたくないのです。

定植用の鉢は十五センチ鉢から十八センチ鉢程度に二篠植え程度が適当です。また、植付け後も腰水する必要はありません。

植え付けたらすぐ肥料

九月以降に植え付けた場合は、植付け後、ただちに肥料を与えます。根周りの土を付けて植え込んであるので、痛みもなく、その分すぐに肥料がやれます。分量はこれまでと同程度。

仮に九月上旬に植え替えた場合、すぐ肥料を与え、その後、九月下旬頃にもう一回与えれば、株元から脇芽が出るほど立派な株になってきます。あまり株が出来すぎると「花止まり」になると言われますが、私はこの現象を感じたことがありません。ほんとうにそうなのでしょうか。

その後、生長の具合を見て、十月中に一回肥料を施しますが、すでに十分立派な株になっていれば、葉色を保たせる程度に、少量施すくらいでも良いです。

十一月になれば、生長もほぼ終わり枯れはじめます。花

菖蒲は短日によつて太い蓄積根を出し地上部は枯れに向かいますが、生育の劣る古株などは、十月下旬頃からさつさと枯れ始めます。何らかの栽培の不手際によりかなり株の力が衰弱すると、九月中から枯れますが、これは翌年まったく花が咲かないばかりか、草もできないうちを前もって知らせています。しかし十分肥料の行き届いた元気な若苗は、秋遅くまで枯れずそれだけ苗が充実します。地域にもよりますが、当地中部地方の平野部では十一月二十日頃まで青々としています。そして降霜によつて枯れます。

重要な春の施肥

土壌成分分析を行つてみるとわかりますが、地植えにくらべ鉢植えは肥料成分の流亡が早く、冬場は肥料を与えないので、春には鉢土の中に肥料成分はあまり残っていないと考へた方がよいです。前年に蓄へた養分で開花するとは言いますが、無肥料では葉は黄色つぽくなり満足な花が咲かないので、春の施肥は立派な株に仕立てるのにとても重要です。良い花を咲かせると同時に立派な苗を育てなければなりません。

春四月の中旬になったら肥料を与えます。昨年と同じ即効性の化成を、秋よりは多少すくなめにしますが、それでもしつかり施します。その後、葉色を見ながら、五月中旬頃もう一度施します。こうすると株が目に見えて太つて立派な株になります。ただ、開花期間まで肥料が効きすぎていると、花がしかんで開花しなかつたり、変によれたりしますので、肥料が効いて株が充実していれば、六月に入つてからは与えない方が無難です。

そのほか、補助的に三ヶ月くらい効く緩効性肥料を、春に即効性とはまた別に施しておくのも良いかと思ひます。

また、これは考へ方ですが、化成を使うと出来はしますが、ともすると葉が剛直になり、葉の潤いというか、やわらかなみずみずしさがやや薄れるように感じられますので、花どきにこれが気になる場合は、春から開花までは有機質系で肥やした方が良いかと思ひます。ですが、私はこの方法を取つていませんので、何をどれくらい使うとかの実際はよくわかりません。

以上のような方法で、十分立派な花が咲くと思ひます。NHKの本に書いてある栽培方法より、かなり攻撃的な作り方で、たいへん多肥栽培に感じられるかもしれませんが、肥料不足で浅緑色の元氣のない葉に小さな花が咲いていてもぜんぜん綺麗じゃありません。花菖蒲は端午の節句の祭りの花です。その点から要求されるのは、剣のような元氣な葉と勢いの良い花です。この方法は、五寸鉢でもこんなに大きな花が咲くんだ、という作り方です。

こんなに肥料を与えて病害が多発しないかと思われる方もおられるかと思ひますが、良く出来ている花菖蒲園の土はかなり堆肥などで肥やされていて、土壌分析で調べてみると鉢栽培よりはるかに多くの肥料成分を含んでいます。鉢栽培は灌水でどんどん肥料成分が流亡しますので、多少肥料を多く与えたくらいでは過多までゆかず、それによつて軟腐病などの病害が増長されることも経験上少ないと感じています。

ただ、前にも述べたように、腰水プール栽培でこのような多肥にすると、夏場にほぼ確実に根が腐敗します。また、多肥と少肥どちらが病害にかかりにくいかと問われると、やはり少肥なのは事実です。ですが、それを

恐れるあまり肥料をやらないでいると、花も小さく株も貧弱になつてしまひます。うちは株の保持数も多いので、多少病害が出て心配しません。それよりも観光的に花が貧弱では話にならないので、こうしていますが、このあたりは考へ様です。

私の場合は慣れているので、何の不安もなくこうしていますが、氣候風土や栽培条件も違いますので、試されるときは徐々に行ひ、花菖蒲の反応を見極めることが大切かと思ひます。文面の鵜呑みではなく、目の前の花菖蒲にそれが応用できるかどうかの判断は、やはり栽培者にかかっています。とにかく、毎日よく観察すること。人に聞いても本当のところはわかりませんが、なれてくると植物が何をしてほしいか向うから言つてきます。それまでに何株枯らすかもしれないませんが、自分でコツを掴むことです。

花菖蒲の栽培は、他の一般的な植物に比べコツが要り、それを会得するまででこずりますが、一度のみこんでしまえば、鉢作りなら露地栽培に比べ比較的コンスタントに栽培することが可能です。